

# 発達障害児における「文字通りでないことば」の理解

—視点取得能力との関連—

田村綾菜<sup>1</sup>・常深浩平<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>昭和女子大学・<sup>2</sup>いわき短期大学)

**【問題】** 田村・常深・楠見(2012) は定型発達の小学3～6年生における「文字通りでないことば」の理解について検討し、ことばの種類や理解の側面によって発達過程が異なることを示唆した。本研究では「文字通りでないことば」の理解が困難であるとされる発達障害児を対象に、ことばの種類や理解の側面によって理解が異なる可能性について検討した。また、「文字通りでないことば」の理解に影響を及ぼす要因として視点取得能力に着目し、その関連についても検討した。

**【方法】** 調査協力者：小学校2～6年生の発達障害児27名が調査に参加した。そのうち、WISC-IIIのFIQ70以上の広汎性発達障害児20名(男児16名、平均IQ=101.7, SD=17.5)を分析の対象とした。**材料：**「文字通りでないことば」課題として、「儀礼的なうそ」(誕生日にあまり好きではないものをもらったが、「好きだ」と言う場面)と「皮肉」(友達の部屋が散らかっているが、「片付けが上手だね」と言う場面)の課題を実施した。各場面で、**確認質問**(文章中に書かれている内容の確認)、**信念質問**(「A(話し手)は「○○○」だと思っていますか?」に対して「思っていない」が正答)、**伝達意図質問**(「AはB(聞き手)に「Aは『○○○』」と信じてほしいですか?」に対して、儀礼的なうそは「信じてほしい」、皮肉は「信じてほしくない」が正答)に回答を求め、社会認知的側面の理解の指標とした。また、**評価質問**(A「○○○」と言ったことは、よいことだと思いますか?悪いことだと思いますか?)について5段階評価を求め、社会伝達的側面の理解の指標とした。視点取得能力の指標として、二次的誤信念課題(林, 2002)を使用した。**手続き：**1人ずつ個別に実施した。A4用紙に印刷された課題を1ページずつ呈示しながら、実験者が各課題の文章や質問、選択肢をすべて読み上げ、口頭で回答を求めた。

**【結果】** **社会認知的側面の理解(図1)：**3つの質問全てに正解した場合は3点、確認質問、信念質問には正解したが伝達意図質問に誤答した場合は2点、確認質問のみに正答した場合は1点、その他は0点を与え、社会認知的側面の理解得点とした。課題ごとに二次的誤信念課題の正答・誤答群の平均得点を比較したところ、「儀礼的なうそ」では、正答群の方が誤答群よりも平均得点が有意に高かったが( $t(18)=2.08, p=.03$ )、「皮肉」では正誤による得点差は有意でなかった( $t(18)=0.9, p=.19$ )。**社会伝達的側面の理解(図2)：**評価質問における評定値を0(とても悪い)～4(とてもよい)で得点化し、社会伝達的側面の評価得点とした。課題ごとに二次的誤信念課題の正答・誤答群の平均得点を比較したところ、「儀礼的なうそ」も「皮肉」も、正誤による得点差は有意ではなかった( $t(18)=0.06, p=.95, t(18)=0.05, p=.96$ )。

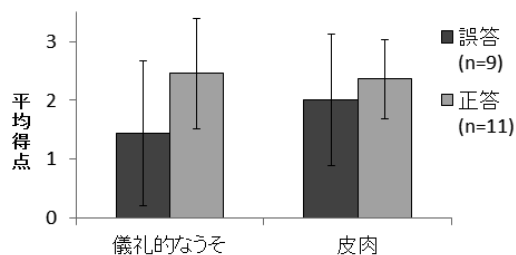


図1. 二次的誤信念課題の正誤による社会認知的側面の理解得点の平均とSD

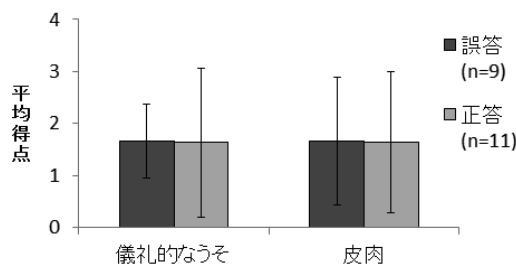


図2. 二次的誤信念課題の正誤による社会伝達的側面の評価得点の平均とSD

**【考察】** 発達障害児における「文字通りでないことば」の理解の特徴が、ことばの種類や理解の側面によって異なることが明らかになった。社会認知的側面について、儀礼的なうそは視点取得が理解を促進しているが、皮肉の理解には異なる要因が影響している可能性が考えられる。社会伝達的側面については、どちらの課題も視点取得との関連がみられなかった。儀礼的なうそ、皮肉の両方で全体的に評価得点が低かったことから、「うそは悪い」という価値観が大きく影響している可能性が考えられる。

**【引用文献】** 田村綾菜・常深浩平・楠見 孝 (2012). 小学生における「文字通りでないことば」の理解の発達. 日本教育心理学会第54回総会発表予定 **【付記】** 本研究を行うにあたり、京都大学こころの未来研究センターの「発達障害と読み書き支援」研究プロジェクトの学習教室に参加する児童と保護者のみなさま、京都大学吉川左紀子先生、正高信男先生、および、プロジェクトの共同研究員のみなさまにご協力いただきました。心から御礼申し上げます。なお、本研究は公益財団法人 博報児童教育振興会の助成を受けました。